

第十四話 郷土の偉人 **村上姑南先生** (昭和30年7月1日掲載)

明治時代の学者にして偉大なる教育家であるところの**村上姑南先生**は、文政元年(1818年)六月一日、中摩村に**孜々**の声を揚げた。

その祖先は**村上天皇**の出にして**左馬頭良氏**は豊前国仲津郡を領した。嫡子**良祐**は**浄喜寺**を開基して僧となり、**今井**

郷に在り。小笠原時代に**村上一伯**と云う者、中摩に転居して医を開業したのである。父の麗沢、**亀井昭陽**に就いて、儒学を学んだ学者であり、母は中島氏の出にして賢夫人であったと云うから、先生は幼にして詩書の学問を家庭に於いて授けられたと思われる。聡明、利滌、孟子論語は数回にして暗誦する程の、神童であった。

少年の頃、学問の道に志を立て、**笈(おい)**を負って、日田の**咸宜園**に入り**広瀬淡窓**の門下生となり、研鑽すること**五星霜**、**経史百家**に精通し、抜群の成績を以て、**都講**に抜てきされ、**辛島春帆**、**広瀬青村**と共に豊前の**三才子**と謳われたのであった。

当時の咸宜園は**海内無双**と称せられ、遊学するものは全国から集まって来たのであるから、先生の実力たるや、推して知るべきである。

然るに、孝心厚き先生は父麗沢の希望に従い、家業を継ぎ、医業を学ぶ為に、僅かに三年にして咸宜園を**卒然**と辞去したのであった。即ち、筑後の**田代大造**に内科を、府中の**権藤可善**に手術を学んで八年間、内外百般の學術、臨床に熟達した後、父母の膝元に帰り、郷里に於いて開業したのであった。

医は仁術なりと言う先生の信念は幼童と云えども懇切丁寧、山間僻地もいとわず足を運び、宇佐郡金谷村、小倉畑村にまで及んだと言うのである。

嘉永二年、三十一才の時に**種痘術**が、始めて佐賀に於いて行われる事を聞いて、非常に悦び、苦心さんたんの末、ようやくその法を得て帰ったのであった。豊前、豊後一円に於いて、種痘を行った最初の人、実に、村上姑南先生である。

慶応二年の四十八才の春、長崎に遊学し、**周彬如**と筆談し、自らたずさえた詩稿を見せて、清国の儒学者の賛辞を受けたと言う事もあった。

明治になるや、長洲藩の奇兵隊の脱徒兵が、花川院の宮を奉ずると称し、宇佐郡御許山に拠って、四日市役所を襲い、東本願寺別院に火を放ち、その勢いは甚だ盛んであり、之が豆田町の永山城を攻める事になったのである。四日市より日田代官に注進の飛脚が山国街道を絶えず往来し、郷土の人々は戦々きょうきょうとしていた。そこで農兵を募して警固に当り、一は庄屋村大行事の岡の上に、一は、犬王丸辻の尾の高所に見張り小屋を設けて、不寝番を勤めたと言う。

此の時先生は、森藩の儒官もしていたので、久留島公の家臣佐々木某と共に、下毛郡各村を巡回して、大いに大義名分を糾(ただす物事の理非を明らかにする。罪過の有無を追及する)して、民心の安定に奔走したのであった。

松方伯が日田県知事になるに及んで、正しい県政の在り方と言う意見書を建白して、褒賞を受け、知遇を蒙(こうむ)ったと言うような事もある。

その頃の交遊者は五岳上人、長三州、村上仏山荷亭、諫山寂村、藤本鉄石、帆足杏雨、恒遠醒窓、園田柏楊、千原夕田等である。明治九年、咸宜園再興さるるや、先生は師に推されて、日田に転居し、孜々奮励して、子弟の教育に当った。先生の徳を慕って、多くの門下生が集まり、その説くところの、漢洋二学は、非常にうんちくを極めたものであった。

明治二十三年、脳溢血を發したが、講義を続け、遂に脳出血し、臥床(がしょう)する事三日にして、卒去したのであった。六月二十一日、享年七十三才、郷里に帰葬した時の門生、故旧は言うまでもなく、老幼男女無慮数百人の参列者は皆、肉親を失った悲しみの模様であったと言う。

(完)